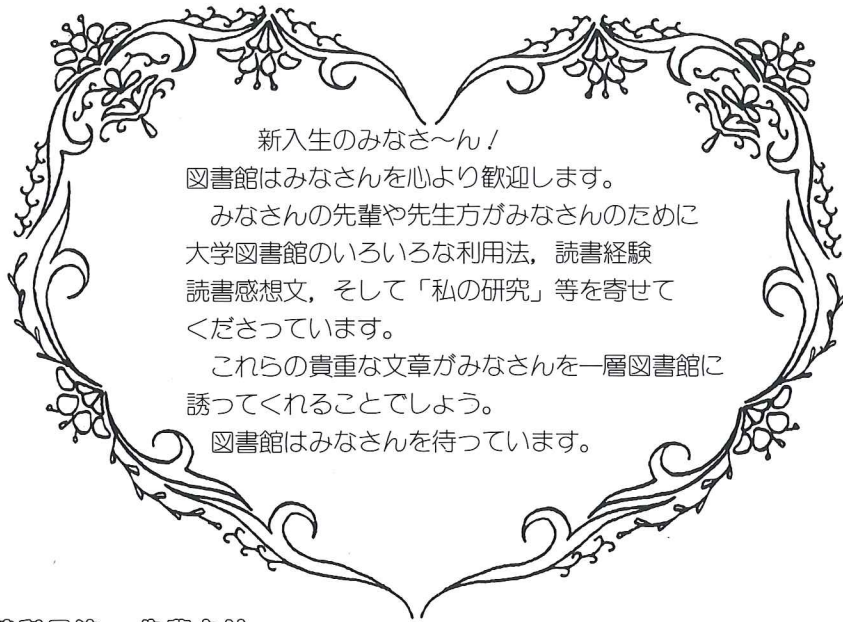




すたぢ

徳島大学附属図書館報 No.43

1991 . 3



新入生のみなざ〜ん!

図書館はみなさんを心より歓迎します。

みなさんの先輩や先生方がみなさんのために
大学図書館のいろいろな利用法、読書経験
読書感想文、そして「私の研究」等を寄せて
くださっています。

これらの貴重な文章がみなさんを一層図書館に
誘ってくれることでしょう。

図書館はみなさんを待っています。

◆図書館利用法—先輩より

『図書館は情報の宝庫です』

小橋智司

新入生の皆さん、数ある大学の中より、我が徳島大学を選択され、又、合格された事を心からお喜び申し上げます。受験勉強、本当に御苦労様でした。過去の実績やしがらみは捨て、我がキャンパスで頑張ってください。

さて、皆さんは、図書館の利用法を知っていますか?ん、何、知っている。でしたら、少し挙げてみて下さい。

1. わからないことを調べる。
2. 勉強する。
3. ねる。えっ。まあ難しい本なんかが目

前にあると、ついつい眠たくなるものですよね。他の人に迷惑がかからなければ、それもよいでしょう。たぶんこんなものでしょうね。でも我が徳大図書館はまだまだ利用法がいっぱいあるのです。

それでは、それらを順々に挙げていきましょう。

まず、新聞がおいてあります。今日のものから、1週間位前のものまであります。つまり、新聞代を払わなくても、世の中の動きがわかるわけです。それにスポーツ新聞もおい

てありますから、スポーツ情報もばっちりですよ。

次に、今月の一般雑誌がおいてあります。映画ファンには「キネマ旬報」、旅行するなら、旅に「旅行読売」、ファッションには「MORE」、文学の大好きな人には「文芸春秋」、現在の政治経済に興味ある人には世界に「アエラ」、科学の大好きな人には、「ニュートン」、徳島の情報を知りたい人には「あわわ」、など、色々のジャンルの色々な雑誌がおいてあります。

当然、学術雑誌は、「サイエンス」、「ネイチャー」(いずれはここに論文が掲載されるようになりたいね。)をはじめとする雑誌類が、バックナンバーを含めて多数ありますし、これらの日本版もあります。

さらに、AVソフトの貸し出しもしています。家に持って帰ってたのしむもよし、視聴覚室へ行ってたのしんでもいいのです。視聴覚室のボックスは2人席になっているので、彼や彼女と仲良くたのしむこともできます。図書館でデートというのなかなか、おつなものですよ。1度お試しあれ。

カセットの中には、英会話のもありますからわざわざ習いにいかなくても練習ができるのです。

図書館に関して、色々述べてきましたが、覚えておいて欲しいのは、図書館は情報の宝庫なのです。この情報というのは、本からばかりではなく、人からの情報もあるのです。図書館には、先輩、後輩、同学年の人々、先生などが出入りするのです、講義で覚えておかなければならない事とか、試験のヤマ、レポートの書き方、要点などを教えてもらったり、又学年が上れば後輩に教えてあげたりできるのです。さらに、相手に時間があるのならば、談話室で議論したり、先輩などの体験談を聞くのもたのしいですよ。図書館がきっかけで彼女や彼ができたという人もあるようです。図書館が縁で友達が増えるのです。

これ以外に図書館の使い道はまだまだあるかもしれません。それを見つけるのは君、この文を読んでいる君なのです。さあ、この本を閉じて図書館へ行こう。いろいろな出会いがきっと君を待っている。(医学部医学科4年)

『図書館をエンジョイしよう』

萩原真理

図書館といえば本を貸してくれる所と思っている人がほとんどだと思います。みなさんも小学校の時初めて図書館あるいは図書室と出会い、貸出しカードなるものを作り、それで初めて本を借りた時、なんだかちょっと大人に近づいたようでうれしかった思い出があるのではないのでしょうか。しかしその後、何冊の本の題名がその貸出しカードに書き込まれたのでしょうか、ほとんど空白だったという人が以外に多いのではないのでしょうか。そして中学、高校と進んでいくうちに、部活など楽しいことが増えるたびに、図書館から足が遠ざかっていった人も多いのではないのでしょうか。そして図書館というものは、本好きの一部の人が利用するもの、カードを持つ人々のための会員制クラブのようなものと思込んでしまっている人もいるのではないのでしょうか。

そこで、貸出しカードを今だに持っていない私の、みなさんのこれまで持っていた固定観念や先入観をブチ破る、図書館利用法をお教えしたいと思います。

そうなんです、実はカードを持っていないでも、徳大の図書館は利用できるのです。本を貸し出すだけが図書館の持てる機能のすべてではないのです。まず図書館の魅力的な機能と言えば、冷暖房がきいてること。これは下宿生には実にありがたい。徳島の夏の暑さは厳しい。そこで図書館へ涼を取りに、いや借りに行くのです。私も去年の夏はよく図書館へ行きました。毎日のようにすずみがてら本を読みに行くのです。何も本を読まなくてもボーとしていてもいいんです。これがとても気持ちEんですよ。明日への活力になる。外の暑さに立ち向かっていく元気になるんです。

冬がまたEんです。暖房がきいていてぬくぬくなんです。冬と言えば、寒さの厳しい2月はまた試験の季節でもあるんです。そしてレポートの季節でもあります。この期間は図書館が一番活況を呈している時です。むろん前期試験をひかえた9月も同様です。混んでいるからといって遠ざかっていたのでは良いレポートは書けません。なぜならカードで借りられるのは最大5冊、しかし図書館内に陣取れば、百冊でも二百冊でも参照できるのです。これは“買い”じゃなくて“借り”得です。しかも

カードも手続きも必要ありません。むろん一人で長時間何十冊も独占しているのは、他の学生の迷惑になるのでどうかと思いますが。

その他、デートやヒマつぶしに最適です。図書館でデートなんて、ちょっと知的でハイレベルで、これは二重丸です。本があるから2人の話題にも事欠きません。ただし大声を出すのはバツですけど。それからヒマつぶしですが、図書館はコストがかからない。

とにかく1度来てみて下さい。

(医学部医進課程2年)

『私の好きな場所』

松本安代

図書館には私の好きな場所がある。2階の閲覧室の南側、助任川が二手に分かれるところが見える席だ。私が徳島に来て、はや1年が過ぎようとしているが、この1年、どれだけあの席のお世話になったかわからない。

初めて徳島に来て驚いたのは“川が多い”ことだ。特に吉野川を初めて渡った時は、その雄大さに感動した。まさに、これが“川”なのだなあと思った。徳島市内を流れる川が元を正せば吉野川であることを知った時、再び“吉野川はすごい”と思わずにはおれなかった。吉野川を見ると、自分自身がいかにちっぽけな存在であるか、そして自分の悩みがどんなにつまらないことかを思い知らされる。ゆったりした川の流れを前にすると、悩むことは何もないといった感にとらわれるのだ。私は何か困ったことがあっても、吉野川を見ると気分が新たになり、もう1度考え直す勇気が持てた。そして、そんな思いを友人に伝えるために手紙を書くのが図書館の“いつもの席”だった。

図書館の利用法は人それぞれであろうが、私は大体、ひとりになりたい時に図書館へ行

った。ひとりで本を読みたい時、ひとりで勉強したい時、ひとりで手紙を書きたい時……そんな時はいつも図書館に行き、川の見えるいつもの席に座った。授業の空き時間や夕方図書館に行って、いつもの席につくと不思議な程落ち着いた気分になった。私にとって、日頃の生活の喧騒から離れられる特別な空間といっても過言ではないだろう。

私は図書館は様々な世界へ門戸を開いてくれる“出会いの場”だけと思っている。もちろん本を通じて未知の世界と出会うということでもあるが、私にとっては自分自身と出会う場所が図書館であったといえよう。

徳大での1年が終わろうとしている。ふと思うと、しばらく図書館のいつもの席に行っていないような気がする。“忙しかったから…”と心の中で言い訳をしてみるが、何だか物足りない。図書館に呼ばれているような気分だ。久しぶりにいつもの席に行こう。1年間の感謝とこれからもよろしくの気持ちを込めて。

(医学部医進課程2年)

『私と図書館』

三宮学

私は大学3年までの間で図書館を利用した

のはレポートを書く時とテスト期間中のみで

した。4年になると卒業研究があるのでさすがに図書館を利用することも多くなりましたが、参考文献を見るだけでせいぜい資料室としてしか利用していませんでした。従って、実質4年間読書のために図書館を利用したことは1度もなかったのです。このことを昨年非常に後悔することになりました。というのも、卒業論文を書いて自分の文章表現力が貧しくなっているのを痛感したからです。つまり、いろんな文章に接していなかったので表

現が固定してしまっていたのです。美術に例えると、名作を見ずに自分の気に入ったものだけを作っていたらさらに下手になっていたようなものではないでしょうか。これではいけないと思い、最近ではできるだけ多く本を読むことにしています。幸い徳島大学附属図書館は質量共に豊富で大変重宝しています。新入生の皆さんも長い学生生活を利用してさまざまな文章に親しんでおいてはいかがでしょうか。

(工学部工学研究科2年情報工学専攻)

『私の図書館の利用法』

谷口徳広

元々、読書をするのが趣味でもない自分が、図書館の利用の仕方について書いて、果たして新入生の皆さんのお役に立てるかどうかは疑問ですが、大学に入ってから自分の図書館の利用の仕方について書いてみたいと思います。新入生の皆さんの中には、読書することが好きな方もいれば、字を見ることがめんどくさいと思う人もいるでしょう。いずれにせよ、大学生活を送っていく上でも、また、より有意義な学生生活にするためにも図書館は、切っても切れない位置にあるものだと思います。とくに最近、専門課程が大詰めに近づくにつれ、図書館が大変ありがたいものだと思うようになりました。

教養部の頃の図書館を利用した記憶と言えば、試験のレポートを提出する時ぐらいでした。文献を探し、レポートの題材に該当する部分をぬき出して書き写す程度で、とても本をじっくり読むというようなことはなかったような気がします。でも、専門課程に入ってレポートの提出の機会も増え、文献を書き写す程度のレポートの内容では、教官も認めてくれないし、何とんでも自分の勉強にもならないと思うようになってきました。教科書なども何冊かは自分で購入しましたが、それだけでは疑問点も多く、かといって高価な専門書を買う程お金もありませんでした。そんな時は、やはり、図書館へ足を運んで、本を探すということが多くなってきたように思い

ます。そんなことで、最近、図書館に足を運ぶ機会も増え、貸りる本の量も増えたようにも思います。

とは言っても、1冊の本を熟読するという気力も時間もありません。どうしても、専門書などを辞書的に活用することが多いようです。でも、自分はそれでも充分意味のあることだと思います。

臨床実習の場に出るようになり思うことですが、教科書や専門書に書かれている通りのことが臨床の現場で行われていないことも時々あることで、そんな時は、自分の疑問点として教官の先生に質問することもできますし、自分なりの考察や感想をもつこともできます。それによって、自分の理解を深めることができますと思います。それだけでも、辞書的に本を活用することは、大きな利用法になるのではないのでしょうか。

また、図書館で何人かで勉強することも、たまにあるのですが、結構、気分転換にもなるので自分は好きです。それに、わからない事があれば、質問し合うこともできるし、本を探して調べることができます。

私の図書館の利用法と言えば、こんな事しか言えないのですが、最後にひとつ言えることは、わからない事があれば、放っておかず図書館へ行って調べる習慣をつけておくことは必ずプラスになっていくのではないだろうかということです。(歯学部歯学科4年)

『私の図書館利用法』(新入生のみなさんへ)

宮川 真佐代

新1年生の皆さん、ご入学おめでとうございます。私はもう大学生生活は終わりを告げようとしています、皆さんは、今本当に“ブランニュー”な状態ですね。これから始まる大学生生活を有効に過ごすために、私の図書館利用体験について書かせていただきたいと思っています。

私は、この4年間、図書館を授業の予習・レポート・卒業研究・就職試験の勉強と多岐にわたる目的でフル活用しました。私は、国語・国文学を専攻していたのですが、3年の時は、演習の授業が週8コマもあったため、毎日の様に図書館に通い(行くと、国語国文教室の誰かは必ずいた)、閲覧室では重たい辞書を何冊も抱えてうろうろしたり(ここで図書館の方に提案、辞書を机まで運びやすいようなカートを閲覧室に置いていただけませんか)、また、ある作家の、ある作品の初出や論評を探すためにマイクロリーダ室に通ったり、研究雑誌閲覧室にこもったりと大忙しでした。今挙げたように、図書館には、閲覧室だけでなく、さまざまな目的の部屋があります。せっかくの設備ですから。自分の使用目的に合わせて、情報を集めて、どんどん活用すべきでしょう。

また、就職試験や学期末の試験の時も、自習室として使わせていただきました。閲覧室

で自習すると、他の人が真剣にそれぞれの研究等のために頑張っている姿を見ることができ、励みになりましたし、家でやるよりも、能率があがります。

さらに、研究や授業以外にも図書館を大いに利用しました。夏休み等の長期休暇の際は長く本を借りだすことができるので、この時に大好きな作家の本をたくさん借りていました。大学生活の間ほど時間がぜいたくに使える時はありません。この機会に長編の大作を1つは読もう、とか目標を立てておくとよいと思います。私はあまり利用しなかったのですが、CDも貸出しされていますので、どんどん利用した方がお得だと思います。

図書館を有効に使えるかどうかは、皆さんのやる気と腕次第だと思います。有効に利用するためには、常に図書館情報に対してアンテナを張っておく必要がありますし、情報を手に入れるためには、職員の方に積極的に働きかけて、いろいろ質問してみるといいと思います。職員の方は皆さん、とても親切な方ばかりですので、丁寧に何でも教えてもらえるでしょう。(私も大変お世話になりました。)

最後に、私のようなありきたりの利用方法ではなく、もっともっと個性的に図書館とおつきあいすることをお勧めしておきます。では……。(総合科学部卒業生)

◆図書館利用法—先生方より

『大学図書館利用法』

薬学部薬品製造工学助手 植野 哲

皆さんは、図書館についてどのようなイメージを持っていますか？ 受験勉強のために参考書に一心不乱に取り組んだ場所、それとも心から感動を感じる様なすばらしい本と出会える場所、もしかすると活字離れが問題になって久しいですからほとんど自分とは縁のない場所といったものではないでしょうか。図書館につ

いてどのようなイメージを持っているにせよ大学での生活において大学図書館の占める役割は増えこそすれ減るようなことはないと思います。なぜなら、大学、特に専門課程で行われている研究は専門的かつ最先端のものであるため研究活動において必要な情報を得るためには図書館を通じて国内外の学術雑誌に

掲載される論文を手に入れそれを読むことが是非とも必要だからです。そして大学図書館のスタッフの方々は、文献検索や文献の入手、図書館の運営について専門的な知識を持っておりコンピュータなどの情報機器を使って私達利用者の要求に迅速に対応してくれています。この様な観点からいえば大学図書館は、書籍という形だけではなく雑誌や、最近ではコンピュータなどの情報機器を用いて人間が蓄えてきた膨大な量のそして、最新の知識にアクセスすることのできる場所ということがいえると思います。この様に書くと教養課程の時代は余り関係がない様に思われるかも知

れません。しかし、図書館には先に述べた学術雑誌などの外に一般の書籍、各種の辞書、そして一般の書店では手に入りにくい大学の講義に関連した参考書が備えられており講義の際の疑問点の解明やレポートの作成などに利用することができます。また、CDやビデオのソフトも備えられており利用することができます。この様に大学図書館には多様なサービスが用意されていて皆さんの積極的な利用を待っており充実した学生生活を送るための重要なパートナーとなることができると思われます。(薬学部薬品製造工学助手)

『図書館利用法の一つ—友内山』

石 塚 寛

貞光町から剣山線に入り、土釜の少し手前に友内山の登山口がある。この山は私にとって一寸した因縁がある。と言うのはかつて東京にいた頃、台湾からの留学生連政男氏と知り合った。その後、彼は日本女性と結婚し日本に帰化したが、帰化するに当り奥さんの姓を名乗らずに電話帳などいろいろ調べて、平易にして且つ類の無い姓をと考えて友内政男として届け出た。私が徳島に赴任して何年か経たった頃、地図の上に“友内山”を発明し、早速友内氏に知らせた。彼は類の無いと言う友内姓に類のあった事に驚き、私に登山する様に言って来た。しかしそれからまた何年か経てしまったが、昨年念願の“友内山”に登山出来た。驚いたことに、この中の中腹に友内神社と言う社があり、さらに標高1073.1mの頂上にも高千穂神社が鎮座していた。そしてこの山で詠まれ、万葉集に収録された歌が友内神社の境内に掲げられていた。頂上で見渡せば周囲の山々の名前は判らなかったが、見晴しは非常に良く、幾つかの山岳部の登頂記念の標識が山頂に立てられていた。こんな話を上京の折に友内氏にした所、早速彼は登山しにやっ

て来た。そして今年になってまた家族を連れて登りに来た。

この文を書くにあたり、この山や神社のことをより知りたくて、資料を調べるべく市内の数軒の書店に出掛けたが、郷土誌のコーナーなどを設けている書店も訪ねた範囲では僅かに1軒しかなかった。勿論目的の本は見当らなかった。そこで常三島の図書館に郷土誌のコーナーのあることが判り早速出掛けて見た。このコーナーには新旧可成りの書物があり、“友内山”が石鎚山系に属する山であるとか、綿麻山とか忌部山とも呼ばれていること、そしてその命名の謂れなど、また友内神社には天日鷲命が祀られていることなどが判った。

そこで特に新しく県外から来られた学生諸君には徳島のいろいろな事象に深い関心をもたれ、そしてそれを良く知ることが日常生活をより楽しくすることにつながるのではないかと思う。そして図書館は勉強のことは勿論それ以外の、例えばこの様な事でも調べるのに非常に便利な所である。利用すれば必ず応えてくれる。いろいろな関心事を携えて図書館通いの癖をつけることが大切であると思う。

(歯学部口腔科学第一助教授)

『文科系学生の「効率的」な図書館利用法』

前 田 泰

1. まずはじめに 徳島大学に文科系学部は存在しないと思う者は呪われるであろう。総合科学部の半分は文科系である。私の所属する社会科学コースに文科コースを合わせると、学生数は毎年約 170名前後に上る。徳島大学全体で工学部に次ぎ2番目の多数派である。

2. 効率利用のキーポイント 図書館は、例えば卒論を書くための道具であると思って頂きたい(図書館員の皆さんごめんなさい)。道具をうまく使うためには、その道具を使って何をしたいのか、その目的を具体的にはつきりさせなければ話にならない。ここでは、卒論やレポート作成のために文献を検索し、資料の閲覧または複写をする目的で図書館を利用する場面を考える。

3. 利用法(1) そこでまずは、文献検索である。ある特定のテーマについてこれまで誰がどのような論文を発表してきたか。理科系の文献調査なら「最新の論文」だけで済む場合が多いから、新しい資料さえ見つければこと足りる。ところが文科系ではむしろ古い文献の方が重要であることが多く、従って網羅的かつ膨大な文献調査が要求される。この文献検索は、図書館員すなわちライブラリアンに相談することが1番である。文献検索の道具を図書館員は「2次資料」と呼び、ライブラリアンはその使い方のプロなのである。

ところがここに問題がある。文科系の2次資料が日本ではもともと不備であることに加えて、徳島大学が理科系に偏重しているという特殊性があるため、ますます2次資料が不足している、というより存在していない。いかに優秀なライブラリアンでも、図書館に2次資料がなければ文献検索に協力のしようがない。ライブラリアンの助言に限界のあることを知るべきである。

もっとも各学問領域ごとに特有の調査方法があるはずであるが、それを総合図書館のライブラリアンに要求することは酷であろう。

指導教官を頼るしかない。結局のところ、図書館では一般的な検索以外に方法がないことになる。それでも和雑誌に掲載された論文なら、ある程度は満足できるはずである。しかし和図書、洋雑誌および洋図書についてはあきらめるしかない。この点で卒論のレベルが低下しても学生の責任ではない。きちんとした2次資料を提供できない学会と、僅かしかない2次資料をも収集できない大学の両者の責任と言えるだろう。

4. 利用法(2) 文献リストが1部でもできたら、次に収集の作業が始まる。ここにも障害が2つある。1つは図書が少ないことである。2つは図書が教官研究室に分散していることである。しかし効率的利用ができるかどうかは、ひとえにこの障害をどう越えるかにかかっている。

① 図書が少ないことについて 徳島大学が、理科系大学ではなく総合大学を名乗りたいのであれば、せめて図書館に最低限度の文献を備えてもらいたいものであるが、ないものは仕方がない。この障害を乗り越えるためには、図書館利用者自身にお金と時間が必要である。

時間とお金には2通りの使い道がある。まず、大図書館に自分で行く方法がある。和・洋雑誌の所蔵館はライブラリアンが教えてくれる。図書館の紹介状があれば、よそのたいの図書館は受け入れてくれる。近畿圏で往復1万円(バスと船)、丸1日かければ2、3箇所は回れよう。首都圏だと往復2万円(両夜行バス)、やはり1日半かけて収集は可能である。これ以外の地域(九州や北海道)にしか文献がない場合に、次の方法にした方が賢明である。

もう少しまともな方法は、私費で「学外文献の申込」をすることである。国内にある和・洋雑誌ならライブラリアンが何とかして複写資料を入手してくれる。費用も複写費用と通信費だけだから自分で行くより安く、かつ楽

である。但し、時間がかかることを覚悟しなければならない。和・洋図書は2次資料がないから、この方法での入手が難しい。自分で大図書館へ行き、カードをめくってみるしかないだろう。

② 図書が分散していることについて
徳島大学内に捜し求める文献が存在することも稀にはある。その場合に生じる障害が教官に対する長期貸出である。理科系であれば講座内に複数の教職員がいるから問題がないが、文科系では図書を管理している教官はたいてい1人だけであり、かつ研究室ないし大学にいないことが圧倒的に多い。ようやく本人を見つけだしても、自分の本であると勘違いしている教官相手に本を借り出すのは面倒な作業になるだろう。しかし、これを乗り越えるためには、気力と体力で各教官にアタックするしかない。お金はまったくかからないので努力のしがいはある。

5. 結論 ライブラリアンの助力を求めつつ、時間、お金、気力、体力の限りを尽くして、文献収集に尽力することが、徳島大学図書館を利用する文科系学生の「効率的」利用法である。厳しい状況ではあるが、これ以

外に方法は存在しないのだから、これで絶望する者は卒論やレポートを書くことができないのである。

6. おわりに一言 学生諸君にとっては意外なことかもしれないが、図書館は総合科学部、医学部等の学部と同様に大学という枠内で一応独立した存在である。諸君らの要望に応じるか否かは、まずは図書館自身の責任で決めることである(「一応独立」とか「まずは」というのは、予算上完全には独立していないから、図書館が「こうしたい」と考えてもできない場合がある……というよりまずできない……からである)。

ハード(図書)の不備はソフト(人材)の充実に求めるしかない。それには限界があることももちろんだが、他に手だてがないのである。優秀なライブラリアンをみんなで応援し、かつ賛成して行こうではないか。そのためには、自分達の切実な要望をまずライブラリアンにぶつけて、助言を求めることである。その場で実現しなくとも、利用者の要望があったということは重要なことである。利用されない図書館は、いずれ淘汰されるに違いないのだから。(総合科学部法律助教授)

『図書館と情報学』

宮本定明

近頃の情報処理技術の発達で、図書館のイメージもずいぶん変わってきたような気がする。マルチメディアライブラリーや情報図書館の構想が様々な場所で聞かれ、これまでの図書館のシステムがこのような傾向にそって変らなければならないことが素人目にもよくわかるのである。

私は昨年12月に当大学に転任してきた新参者であるが、以前住んでいた筑波研究学園都市には図書館情報大学があった。自分がデータベース関連の研究に携わっていたこともあって図書館学を専門とされる何人かの先生方との親交があった。先生方が一様に話題としておられたのは、図書館における計算機利用の普及に対処すべき図書館員の教育であり、また、

将来の図書館学における計算機と情報メディアについてであった。

図書館学については御存知ない方も多いと思うが、伝統的な索引や分類から、先端的なデータベースまで幅広く研究されており、最近では、図書館には計算機と情報処理が欠かせないという認識によって、図書館情報学という呼称が定着しているようである。

図書館学と情報工学にまたがる境界分野に文献情報の計量的研究があり、この分野で図書館学の先生と共同研究を行う機会があった。この分野を計量書誌学(bibliometrics)と呼び、データベース等に表された多量の文献情報を統計的に分析して、学術の動向や構造を大局的に把握しようとする目的をもつ学問である。

文献情報データベースが発達するにつれて、世界的に盛んになってきた新しい分野であるが、我が国では、未だみるべき成果は少ない。その1つの理由は、図書館関連の学科が欧米に比べて少なく、かつ、通常の図書館では、研究を行うことが不可能であるからだという意見を聞いた。

図書館学の先生方と共同研究し議論するのは、楽しく、啓発されることが多い。先生方が深い文科的教養と、理科系的感覚を同時に備えていられるからであろう。雑談のときにはよく、理科系と文科系の違いやギャップ、あるいは共通点などが話題になった。

最近の図書館情報学は、計算機に関連する理工学の側面と従来からの文科的側面をもつ

学際的分野である。また、図書という媒体は情報科学の応用対象として最も重要であると同時に、扱いの非常に難しい対象であると思われる。例えば、ハイパーテキストは、図書の形態を根本的に変化させる可能性をもっているが、実際に役立つハイパーテキストを開発するのは容易ではない。

現在の図書館は、もっぱら図書の閲覧と貸借の場とみなされているのかも知れないが、実は、図書館にも様々な利用法があり、将来はその楽しみかたが益々多様化するように思われる。大いに図書館を利用し、かつ、将来の図書館について様々なアイデアを一人一人が考えてみるのも面白いことではないかという気がするのである。(工学部知能情報工学
知能工学, 助教授)

『図書館の今昔』

三 村 康 男

わたしの図書館の利用法は3種類に分けられる。その一つは図書館を受験勉強の場として利用したことである。図書館本来の利用法とは異なり、ほめられたことではないが、戦後住宅難で家庭でとても受験勉強ができた時代ではなかった。利用したのは、大阪府立中之島図書館である。あらかじめ、一般教養書の貸し出しを行い、その本を机のうえにおきあらかじめ用意してきた受験参考書をひらいて、本来の受験勉強をした。同じような待遇の人も多かったであろう。9時開館で入館できたのが10時頃のときもあった。時々、図書館の人が、本来の目的以外に利用することに注意されていたこともあったが、その時は貸し出し図書を読み、その内容をまとめる振りをして、その場を凌いだこともあった。

ついで医学部の図書館を学生時代に利用したことがあった。西田哲学にこつてみたこともあった。当時は視聴覚室などあったわけではない。コピー機もあったわけではない。よんでまとめる作業の連続である。また、昭和20年代といえば、医学書は洋書はほとんどドイツ語、それにざら紙に印刷されたような教科書があったに過ぎない。医学書は文科系の図

書とは異なり、テクニカルな表現をマスターすれば、辞書と首びつきで読むようなことではなかった。英語の教科書はほとんどなく、時代とともに英語に切り替えていくのに苦労した。今でも、学位論文のさい、ドイツ語かフランス語の筆答試験を行ってはいるが、当人達にとってはかなりの負担でもあるようだ。とくに、話法の助動詞の受身型は、論文には出てくるのだが、文芸作品には少ないのか、ドイツへ留学してはじめて、その使い方に慣れたという恥ずかしい語学力であった。

医学部へきてからは、文献の収集が必要であった。すべてタイプに打ち、それを訳することであった。長い論文ほど、タイプが必要であったが、今から考えると随分時間の浪費をしたものであった。それだけ情報量が少なかったともいえるが、タイプした論文は貴重で、全訳したことも稀でなかった。

現在は、講義録はプリント、教科書は溢れる程になっている。コピーも完備し、資料の収集は随分楽になった。反面、コピーをすれば読んだ気持ちになり、安易に抄録だけを見て、引用することもあり、自戒している。まじめな利用も結構、データに利用するのもよ

かろう。価値感が変動するので、多方面で利用されたらよいと思う。広い視野、趣味の多

い、話題にとむ教養を身につけるなど、多に図書館を利用してほしい。(医学部眼科学教授)

『音楽・仕事』

田村綾子

4月から徳島大学に入学された皆さん、もうキャンパスの雰囲気になれましたか。3年あるいは4年後の皆さんの輝いた瞳を期待しながらこの文章を書いています。

あなたの御趣味は？とよく尋ねられることがあるのですが私は非常に困るのです。無趣味だから困るわけではありません。私は大の音楽それもクラシック音楽の鑑賞が趣味です。でもクラシックと話す10人中9人までがへー変わっていますねという表情をあらわします。別に私事ですので変な目でみられても構わないのですが、仕事が一向に進んでいかないので閉口です。それで最近ではテニスですと答えるようにしています。しかしやはり音楽の話をしたくってうずうずしているので音楽の話をしようと思います。

ベートーヴェンは実に輝かしい音楽を今に残しています。その例としてよくカラオケで聴く「キスは目にして」は、「エリーゼのために」の原曲に歌詞がつけられたものです。ポピュラーの分野では“The Longest Time.” Billy Joel が実に臆々と歌いあげています。この中には悲愴ソナタの第2楽章が挿入され、これに歌詞がつけられています。商品名はあげませんが、TVコマーシャルでお酒のバックミュージックは「ピアノ協奏曲第5番」が使われています。あの気むずかしい顔をしたベートーヴェンも現代の音楽生活にすんなりは入り込ん

でいます。それから、少しベートーヴェンに馴染みができ始めると気が付くことですが、交響曲の第5番「運命」、誰もが知っているあの始まり、そうタタタ／ターのリズムのパターンは「ピアノ協奏曲第4番」や「悲愴ソナタ」の第1楽章にそのままできます。現在の音楽にも影響を及ぼしているベートーヴェンでさえ基本となっている楽想は数多くはないのです。タタタ／ター1つのパターンを実にさまざまのバリエーションで共通性と同一性で工夫し表現しています。「第5交響曲」はこの上もなく劇的音楽だし、「第4ピアノ協奏曲」は他のどんな人も書いたことのないような哀歌的で叙情的な音になっています。「悲愴ソナタ」は哀愁と情熱を一気に沸き上がらせています。いろいろと違う表現が極度に広がり内容的に深まりをみせています。基本が同じだから変化がますます多様になっているのです。ベートーヴェンのこのような作品のあり方は現在の私たちの仕事や学習にも通じているのではないのでしょうか。私は年齢と共にいろいろな顔を持ち始め、多様な仕事を同時に行わなければならないことがあります。しかし共通点は多々あるため仕事の量の割に多忙とは感じません。基本の追求の大切さ、そしてその基本を種々の場で共通性と同一性を求めながら表現し、内容的深まりを求めていく姿勢を持ち続けたいと思います。(医療短大看護学科講師)

音楽を図書館で楽しみましょう！

色々な事で、心が落ち着かない時、嬉しい時、寂しい時、どんな時でも、音楽はみなさんを慰め、励ましてくれます。図書館には、LP1,000枚、CD1,000枚以上、クラシックの名曲名盤と言われているものは殆ど整備されて、みなさんを待っています。図書館の聴

覚室やみなさんのお宅や下宿で聴きながら思索するものたのしいものです。LPやCDの貸出は、一人5枚(但し、セットになっているものは1枚として扱われます)10日間です。みなさんの情緒性が益々豊かになりますように……

◆読書感想

『読書について考えること』

蛸名 洋介

先日、以前お世話になった先生から1冊の本が送られてきました。教授退官を記念しての随筆集で副題が「ある医学徒の戦後」と書いてあった。退官されてからもう4年も経っているのに呑気な先生である。最近ほとんど本を読んでいないが、ばらばらと中に挿入されている水彩画や写真（先生自らが書かれたり撮られたりしたものである）を見ているうちに読んだ。

私は1985年アメリカ留学から帰国し、熊本大学医学部遺伝医学研究施設に助教授として赴任した。インスリン受容体の構造と機能の研究をしていたので、代謝内科の教授をされていた鶴沢先生のところから若い医師が何人か私のグループに来られ研究をしていた。この鶴沢先生より送られてきた本である。当時私のところに行くと2時間位は帰ってこない。鶴沢先生とお話しをしていると面白いといっていたのを思いだし、この本を開いてみる気になった。3年間熊本大学にお世話になっていながら、直接先生とお話しをしたのは短い時間であったと思う。博識で医学を広い視野で見られている方だという印象と、先生もこの本の中で書かれているが、多くの友人を戦争でなくし、自分が生き残っていることが申し訳ないというなんともいわれぬ雰囲気をもたれている先生である。戦争中工学部を卒業され、造船に携わっておられたが、戦後医学部へ再入学された。長い間、「日本経済新聞」しか読まれなかったようだ。戦中派のせいか新聞というものが信用できない。株はやらないが経済新聞の株

価の動きが、世の中の状況の変化を判断するのに良い材料であると考えられていた。内科医らしく検査値を見て判断するような感じがした。また先生は「己の哲学をもたなければいけないと思ったとき、すでに自分の人生のほとんどが終わっていた」とも書かれていた。読書の楽しみの1つは、本の中で他人の人生をいくつも生きることができると思っている。本の中で他人の人生を生きながら、自分独自の哲学を形成していく。私も高校時代はやたらと長編小説を読みあさった。東京の実家のかつての私の部屋から、子供達に読んでもらいたいと思う本を持ってきて、中学生と高校生の2人の息子の部屋の本棚にそっと並べておいても一向に読む気配がない。読んでいるのはマンガ本ばかりである。子供達が小学生の頃から、まず第1にスポーツで体を鍛え、第2に読書で己の哲学を形成し、最後に、勉強で頭を鍛えよ。勉強は3番目だぞと教育してきた。小学生の頃は訳がわからず聞いていたが、最近はこの様なことをいうとさっさと部屋を出ていってしまう。時代の移り変わりと共に、読書にとって替わるようなものが出てきているとは思えないのだが、絵画、彫刻、音楽のような芸術と同じで、いい文学はいつの時代になっても良いのである。ただその吸収に時間がかかり過ぎるため、芸術とは異なり、現代人にとって読書はだんだん疎遠になっていく運命にあるのではないかと心配になってくる。

（酵素科学研究センター教授）

『一つの読書経験』

澤田 健吉

旧制の高等学校の生徒の時よく歌った蛮歌に、デカンショ節がある。冒頭のデとはデカ

ルトのこととされている。デカンショ、デカンショで半年暮らすような哲学青年ではなか

ったが、それでもデカルトの書いた「方法序説」の方法という言葉に、何か引かれるものを感じたらしくて、その時角川文庫の中にある小場瀬卓三訳の1冊を買っている。

最近になり、雑誌「現代思想」のデカルトの世紀という特集や現代哲学の冒険というシリーズのなかの「技術と遊び」など偶然手にした本に、とはいえある程度の関心あつてのことだが、『デカルトの「方法序説」は奇書であり熟読したい本である。』と書いてあるのを見るにおよんで、昔がよみがえって来た。

そこで今度は目的的に岩波文庫の落合太郎訳の「方法序説」を買ってきた。さらに図書館から「方法序説を読む」と副題のついた田中仁彦の書いた「デカルトの旅デカルトの夢」を借り出して、そして中公文庫にも野田又夫訳の「方法序説」があるのを知ってから、これを購入するまでになっていた。

次にすることといえば、この3冊の「方法序説」の読み比べになってくる。まず、第2部に学問をするのに必要な方法として、「明証的な真理しか受け容れない・多数の小部分に分割する・思考を秩序だてて導く・完全な列挙と広範な再検討」の4つの準則が挙げられているのに注目した。このように質を欠いて延長だけを還元する方法は、現代の科学の実情を批判する人に原罪と呼ばれても、我々は現在の科学の方法論の基礎として教えられ、日ごろ力学の問題の解析に使うなじみの方法で、それが初めて文献にでたところである。

しかし第4部まで読み進むと、「私がそれに依存し、私の持っているすべてのものを私がそれから得ているところの、より完全な何か」と書いて神をもちだしているのが目に入る。このような方法で学問をすることが自分に許されるか、と疑った形而上学がデカルトにあるのは、今まで気が付かなかったし、また注意された記憶もない。『わが国の科学技術の模倣的性格は、形而上学を積み残しプラグマティックな面だけを輸入した歴史によって』と幕末の実学思想史を研究する人に指摘されていたのが思い出される。

第2部にはさらに「これらの諸組織の間に多様性が存在するという一事でもって、多く

の欠陥があることを確認するにいたるのであるが、かかる欠陥があるとすれば、習慣は確かにそれを大いに緩和し、それとは気づかぬが、欠陥の幾分かを避け、または矯正さえもしたのである。」とある。別の本の同じ場所は「それらの組織の複雑なものを見るだけでも、その多くが不完全であることは十分に証明される。その不完全さをば、うたがいもなく、習慣がまことにうまく緩和してきたのである。」ということが書いてある。

この違いは小さいようだが、それなりに大きいのではなからうか。前者には動的な後者には静的な調子が感じられ、訳者が「方法序説」を近代哲学の父の告白文とみたか論文とみたかの差が出るように思われた。一例だけで理解せよとはいかにも乱暴だが、つまるところ「方法序説」をゆっくり読んでみたらということになる。

同じ場所でも第3の本は、「いったいそれ等が種々異なった形をもつという事実がすでに、それらの多くが不完全性をもつと思わせるに十分なのであるけれども、しかしいろいろな不完全なところはあってもそれらは、明らかに習慣というものによって、大いに和らげられているのである。」と書いてある。読み易いことと間違いなく読みとめることは必ずしも同じではないはずだが、ともかく違ったものを持っている。

最近こういった読書経験をしたのだが、これがこのパンフレットの編集者のいう「新入生を対象とした図書館に関する記事」になるかどうか心もとない。それでも、ともかくこの文を終わらせるため、これらを纏めて、

- 1：1冊の本で満足は得られない、次々に次の本が引き出せる、
- 2：本を読む時、思い込みによる拾い読みを避けるのは難かしい、
- 3：別の本の読み比べは、理解の助けになる、と書いておこう。

(工学部建設工学科社会基礎工学教授)

一冊の本『往生要集』

戸田宏文

「世に従はん人は、先機嫌を知るべし。ついで悪しき事は、人の耳にもさかひ心にもたがひて、その事成らず。さやうのをりふしを心得べきなり。但し、病をうけ、子を生子、死ぬる事のみ、機嫌をはからず、ついで悪しとてやむことなし。生・住・異・滅の移りかはる実の大事は、たけき河のみなぎり流るゝが如し。暫も滞らず。ただちに行ひゆくものなり。されば真俗につけて、必ず果し遂げんと思はん事は機嫌をいふべからず。とかくのものひなく足を止むまじきなり。中略 生・老・病・死の移り来る事、またこれに過ぎたり。四季はなお定まれるついであり。死期はついでをもたず。死は前よりしも来らず、かねて後に迫り。人皆死ある事を知りて、もつこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干潟遙かなれども、磯より潮の満つるが如し。」(徒然草第155段)

自然の推移は、春夏秋冬の順序に従って行われるが、人の生・老・病・死の転変は、自然の移り変り以上に迅速であり、その死は、一挙に迫ってくることを兼好は美事に語っている。

永遠の生命を願望しつつも、必ず死を経験しなければ、人は人となり得ない。ここに最大にして、最後の苦悩があると言えよう。この死を如何に超え、よりよき死を迎えんことを説いているのが、源信が書いた『往生要集』の「臨終の行儀」である。

人はその臨終に際し、死に脅え、自己の一生の生き様を思ひ、悩むであろう。この臨終に際して行われる儀式は、『往生要集』の「別時念仏」で述べられている。これは「行事」と「勸念」との2つに分けられる。

「行事」は次の如くである。

僧房において病人がでると、病人は別の場所に移される。無常院と称されるこの堂は、浄められ、阿弥陀仏の像が安置されている。そこで病人は、この仏像の前に、五色の幡を手執り、聖衆来迎を一心に願いながら、念

仏しつづける。病人に来迎の姿が映ったならば、看病人(瞻病人)はその言葉を記録する。病人がなにも語らない場合、看病人は、病人に「なにが見えるか、どのような情景が映るか」と問い、もし生前の罪が大きく浮かぶようであれば、そばに居る人は、共に懺悔し、その上で来迎を期する。看病人は香をたき、敬華して病人の周囲をととのえ、病人が正念を失い狂死しないよう色々配慮をなす。この「行事」は、臨終を平静な心の状態(正念)で迎えることを目的としている。

次に「勸念」は、臨終に念仏を勧めることである。志を同じくする者は、友が病に臥した時、訪れて勸念すべきことを述べている。その言葉については、源信は、自らの心得を次の如く述べている。

「仏弟子よ、あなたは、年来念仏のみを勤めてきた。なかでも期するところは、臨終の十念である。いま病床に伏し、恐れずはおられない。どうか眼を閉じ合掌して次の如く誓いを立てなさい。仏の相以外の色を見てはならない。仏の法音以外の声も聞いてはならない。仏の教え以外のことを説いてはならない。往生以外のことを思ってはならない、と」

このように「臨終の行儀」は看病、看死を中心としている。

現在、死を如何に看取るかについて、ホスピス或はヴィハラーが提唱されているが、この源信の言う「臨終の行儀」は、現代人の美しい死、よき死、或は如何に臨終の医があるべきかについて示唆を与えてくれる。

(教養部倫理学教授)

『わたしの一冊』

曾田 紘二

私にとって「読書」は趣味ではなく、仕事です。読む本の種類はいろいろで、かなり雑読的ですが、よくみると、そこに共通した関心があるようです。簡単に言えば、それは、「ワタシ」は何処にいるのか、ということです。別のことばで言えば、歴史的な縦軸と、同時代の多様な文化という横軸のなかで「ワタシ」は何処に位置しているのか、ということです。

このような関心から言って、大きな示唆を受け、今も繰り返し参照しているのが、1974年に出版された。R.Engelsingの“Der Bürger als Leser (読者としての市民)”です。この本の論の骨子は、18世紀半ばのヨーロッパで、「読書」をめぐって革命的な変化が起ったというものです。ひとつには読者層の変化がありました。それまでは、学者、僧侶などごく限られた人だけが読んでいましたが、18世紀半ばになると、「学者も学問のないもの、貿易商も、職人も農場主も、軍人も、老いも若きも、男も女も読書の時間を持つようになっている。今日ではだれもが読書したがっている。クロック係の女の子や、御者や、馬の先駆けでさえも例外ではない。」という状況になりました。つまり、「読書」という行為が当時の新しい社会現象になったわけです。

もうひとつの変化は、読まれた本の種類に

あらわれました。それまでは、聖書、教理問答書など限られたものが繰り返し読まれていました。しかし、だれもが読書するようになると、旅行記、歴史、そして小説などが読まれるようになり、読書のジャンルがひろがって行きました。

こうして、グーテンベルグがはじめたといわれる近代的印刷術の恩恵が、およそ300年後に一般民衆の手許に届きました。そして、18世紀のヨーロッパでは、印刷物がいわばニューメディアであったわけです。この頃、ドイツ各地に「読書クラブ」が生まれ、人々は共同で本を購入し、順番に読み、読んだ本について語り合い、皆が読み終った本は入札によって払い下げられました。また男たちは、備付けの新聞を読むためにカフェに集りました。こうして、読書を通じてそれまでなかった新しい人間のつながりもうまれていったようです。

18世紀は近代ヨーロッパ誕生の集大成の時だったわけですが、19世紀になって明治の時代になると、この近代ヨーロッパの波が日本にもやって来ました。私たちはこのような大きな流れのはしっこにいるわけです。

最近のメディア・通信革命と重ね合わせてこの本を読むと、18世紀半ばのヨーロッパのひとだちに何がしかの親近感を覚えます。

(医療短大一般教育教授)

『わたしの一冊』—山への憧れ—

山口 巧

大学受験の疲れを癒す目的で、私は山歩きサークルに入学した。元来、放浪と自然好きという性格によるのか、山は気楽に登れるということがたつだって次第に山にのめり込んでいった。本当の山男ならここで岩登りへ、そして海外の山々へと導かれるのだろうが、体力も技術も、度胸もそして金もない私は、到底その方向へは進むことができなかった。

しかし、山に対する私の関心は途切れることなく、山に関する様々な雑誌や山岳小説を読むようになった。その様々な本の中で最初に出逢ったのが「栄光の岩壁」(新田次郎著)であった。

「栄光の岩壁」のあらすじをここに紹介する。主人公の竹井岳彦は中学時代から次第に山に没入していき、18歳のとき八ヶ岳で遭難

して友人の命と自分の両足先の大半を凍傷によって失ってしまう。この苦難を山に向ける異常な情熱と執念そして強烈な意志によって乗り越え、やがて“ない足”を甦らせ、次々に未踏の岩壁を征服していく。やがて、日本一のクライマーに成長した彼は、海外の山へと導かれ最初にアイガー北壁に挑むが、悪天候によりこの挑戦は退けられてしまう。しかし、彼のアイガー北壁に対する執念はますます激しく燃え上がり、その思いが彼を再度アイガー北壁へと向かわせた。しかし、またもや悪天候に阻まれてしまい、遂に矛先をマッターホルン北壁に転じる。血みどろの足を引きずりながら、ついに彼は日本人として初めてマッターホルン北壁を征服する。実在の人物をモデルにした物語である。

この物語の中でアルピニストに不可欠な条件として次の4項目の条件があげられていた。

1. 健康な肉体
2. 強固な意志
3. 謙虚
4. 情緒

この4項目は、アルピニストだけでなく、あ

らゆる分野で頂点をきわめる人物に不可欠な条件だといっているように私には思えた。また、この4項目は、この作者の全作品に通じて述べられているものである。「栄光の岩壁」だけでなく作者の全作品は単なる山岳小説ではなく、このように山を背景にして、我々若い世代の人達に生き方というものを伝えている。

この本の中で、大学生になった自分にとって非常に心に残った一文がある。そのくぐりを最後に挙げておく。

「受験、受験と目の色を変えている学校がいやなんです。だからと言ってぼくは大学を否定しているのではありません。大学へ行って勉強することはいいことだと思います。だが、それだけじゃあないですか。——大学へ行かなくても、大学で勉強するぐらいのことは自分でできると思うんです。それよりもぼくは、大学へ行っても決して教えて貰えないような生きた勉強をしたいと思うんです。——徹底的に山をやって、山の中で自分を発見しようと思うんです。」

(薬学部薬学科卒業生)

『忘れてしまった想い』

西 路 可

日常生活の中のちょっとした出来事、実は一つ一つがとても素敵な事なのに私達はほとんど素通りしてしまいます。忙しい毎日走り走りでおくっていると、前からどんどんやってくる物事が、気付かないままに横を通り、後ろを走りさってしまいます。でも、そんな中でふとした事に気が付き、何が想いを寄せるのは、とても素晴らしい事だと思うのです。それはまるで、いつも車で走り去る道を、ゆっくりと散歩した時に、ここにこんなお店があったのか、あそこにあんな花が咲いてたのかと発見するようなものです。

私にそんな事を気付かせてくれたのが、ボブ・グリーンというコラムニストです。彼の本の中には、ほんのちょっとしたきっかけで立ち止まってじっくりと見たり考えたり、ま

た時にはふり返ってみる、そんな事がちりばめられています。私が彼のコラムを読んだきっかけは、彼の17歳の1年間の日誌が本になっていて、その時17歳だった私が親近感をおぼえて、その本を手にとったのが初めてでした。それから彼の本からうかがえる人柄や、視点のつけ所にひかれ、コラムも読んでみようという気になったのです。彼のどの本の中にも、慣れ親しみすぎて忘れてしまった感動や、今はもうそういう想いをしたことがあったと思い出せるのみで、2度と同じように感じられなくなった自分がうつし出されています。

本の中では色々な事が起こり、誰かが何か想いを寄せます。私達が皆同じようには体験したり、感じる事はできませんが、似たような事は体験しているし、同じような気持ちにな

った事もあります。毎日の生活は忙しすぎて
実際に立ち止まってゆっくりと周りを見るこ
とは難しいものです。その代りに、忘れ去

てしまった事を思い出させてくれる本を手
にとってみるのは素晴らしい事だと思います。

(医療短大看護学科3年)

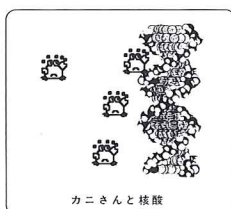
◆
カ
ノ
コ
ク
＜
研
究
生
活＞
カ
ノ
コ
ク

究 極 の 化 学 — 生命現象から分子素子まで — (大学における研究生活とは)

教養部化学教授 釘 宮 慎 一

今から10年前の1981年に私は京大工学部合成化学科を卒業しました。4回生から研究生活がはじまったとすると去年が10年目でした。ここでは少し振り返って見ましょう。

サイエンスには国境が(また本来サイエンスであるならば物理学や化学, 生物学その他の学問の間の国境も)ありません。欧米の研究雑誌に論文を投稿(英文)して, 国際会議などで発表したり, 研究について外国の教授, 博士研究員たちと何時間も議論する。こういうことがごく普通です。研究室にきた4回生は最初とまどいます。これが大学のサイエンスだと思うのに私の場合1月かかりました。



カニさんと核酸

4月から5月にかけてトロント大(カナダ)のジョーズ教授を招いて数回にわたるセミナーと修士課程1回生の先輩の研究発表(もちろん英語で), 夜おそくまでの楽しそうな(そのころは英語の聞き取りがだめだったので内容はわからなかった)議論(おもにNADHの人工酵素系と酵素系との比較), ジョーズ教授夫妻との嵯峨野へのハイキングのあとは違和感がなくなっておりました。以来月に1人くらいの割合で研究室へ来る外国の有名教授のセミナーとそのあとの京都観光の案内役にできることを楽しみにしていました。

人生では多くのすばらしい人に出会いたいものです。大学でも何人のすばらしい先生(研究・人柄・情熱・生き方など)に出会うことができるかが重要だと思います(すばらしい友人にも)。幸い私の場合2人もいて, 京大在学時の恩師 故・田伏岩夫教授, コレージュ・ド・フランス(パリ)留学時のジャン・マリー・レーン教授の2人の生き方, 考え方の影響を今も強く受けています。

学生時代はすばらしい先生を発見してそこで楽しく一生懸命に研究する。やはり研究という経験が大学では重要でしょう。研究経験することが本当の大学での勉強であり, 先生大学院生・学部学生・教養部生がお互いに協力して研究経験できるシステムが大学教育でしょう。ほかでは経験できません。講義, 演習, 実習だけでは不十分・不満足でしょう。

更に大学の研究には夢があるべきです。夢が研究に発展しないとイケません。そのためには創造力, 直感力, 論理力を磨き続け, また不断の気持が必要で。そして化学には芸術にも似たところがあります。「化学(分子・超分子のサイエンス)は博物学や歴史科学とは異なりその研究対象を創造する(ベルテロー: フランスの有機化学者)」まただれが最初に発表したかというオリジナリティーも重要です。世界中のほかの人では考えつかなかった概念・理論・実験を生み出すことはサイエンスを研究してる人の喜びでしょう。ただこのような経験をするには自身を絶えず訓練しておくことが必要なのです。

このようにして現在に至っております。さて, 徳島で私の研究している領域は生物有機化学, 生物無機化学, 超分子化学です。現在の化学の可能性を突き詰めていく(究極)と1つは生命現象の化学的アプローチであり, 1つは分子素子になるでしょう。分子と分子とがデリケート相互作用する(協力しあう)ことにより新しい可能性が開けます(分子の世界と人間の世界を比較してみるのも面白いものです)。1989~1990年は核酸を分子認識するヘム分子の合成とヘム液晶(分子ケーブル)の合成でした。1991年はさらに新しい展開を考えています。学生の皆さんも先生方もお互いがんばりましょう。

Research is to see what everybody has seen and think what nobody has thought.

セント・ジョルジ

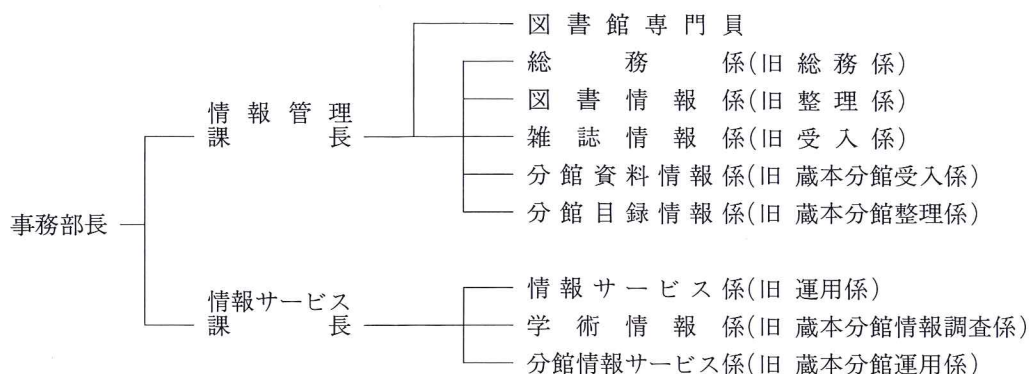
◆図書館だより

附属図書館事務部の部課制発足

附属図書館事務機構強化のため、平成3年4月（予算成立後）から事務部が1部2課制として発足することになります。これに伴い係名も情報化社会にふさわしい名称に改め、

本学図書館の運営及びサービス体制の整備充実を図りたい。

なお、新しい事務機構図は、下図のとおりです。



CD-ROM検索サービスの利用について

このたび、本館において、CD-ROM検索装置を右記のとおり設置し利用者みなさんに利用していただくことになりました。

検索方法はいたって簡単です。OPAC(蔵書検索システム)と併せてご利用下さい。

なお、詳細については、情報サービス係(内線 6142, 6143)までお問い合わせください。

記

- 利用できる検索ソフト
 - ① CD-WORD(8ヵ国語)
 - ② 広辞苑
 - ③ 模範六法(三省堂)
- 設置場所 本館情報サービス係参考コーナー(2階)
- 利用時間 平日日 9:00~17:00
(暫定) 土曜日 9:00~12:00
- 利用対象者 本学の教職員, 大学院生, 学生, 名誉教授
- 利用料金 無料
- 利用開始年月日 平成3年4月1日から

年間貸出ベストテン（平成2年）

順位	書名（著者名）	回数	副本
1	筑摩世界文学体系 35. ホーソン（トウェイン, M）	69	10
2	Turbo C 初級プログラミング 上下（河西朝雄）	60	7
3	半導体デバイスの物理 1（Sze, S. M.）	45	5
4	わかりやすい土の力学（今井五郎）	44	11
5	有限要素法流体解析（川原睦人）	34	2
6	新大系土木工学 第22巻（土木学会）	31	1
7	水理学, 続水理学（本間 仁）	31	1
8	土質工学基礎叢書 2（鹿島出版会）	31	1
9	こんな子供に誰がした（杉田峰康）	30	4
10	フランクフルト著作集 1（Frankl, V. E.）	28	4

年間指定図書貸出ベストテン（平成2年）

順位	書名（著者名）	回数	副本	指定科目
1	動物の体内時計（桑原万寿太郎）	53	16	生 物
2	動物園で学ぶ進化（堀田 進）	37	10	生 物
3	動物と太陽コンパス（桑原万寿太郎）	33	13	生 物
4	基礎定性分析実験（岩崎岩次）	29	13	化 学
5	水の話〔化学の話シリーズ6〕（伊勢村寿三）	26	9	化 学
6	分子の世界（科学研究振興会）	26	4	化 学
7	微積分学演習（栗田 稔）	26	5	数 学
8	人間社会の形成（今西錦司）	26	9	生 物
9	経済学の生誕（内田義彦）	25	16	経 済
10	熱・統計力学〔物理入門コース7〕（戸田盛和）	25	15	物 理

年間CD貸出ベストテン(平成2年)

順位	曲名	演奏者	回数
1	交響曲第9番ホ短調「新世界より」 作品95 (Dvorak, A.)	ウィーン・フィルハーモニー 管弦楽団	15
1	エニグマ(謎)変奏曲 作品36 (Elgar, E)	ロイヤル・フィルハーモニー 管弦楽団	15
3	ブランデンブルク協奏曲第4番ト長調他 (クラシック大好きシリーズ) (Bach, J.S)	アカデミー室内管弦楽団	14
4	交響曲第6番ロ短調作品74〔悲愴〕 (Tchaikovsky, P.I)	シカゴ交響楽団	12
4	ヴァイオリンコンチェルト第1番ト短調他 (von Bruck, A)	シカゴ交響楽団	12
4	トランペット協奏曲変ホ長調他 (Haydn, J)	バンベルク交響楽団	12
7	ショパン名曲集 (Chopin, F)	Horowitz, V. (Piano)	11
7	オルガン作品集 トッカータとフーガ (Bach, J.S.)	Koopman, T (orgel)	11
7	ピアノ協奏曲第1番変ロ短調作品23 (Tchaikovsky, P.I)	Argerich, M. (Piano)	11
7	アルルの女第1, 2組曲, カルメン組曲 (Bizet, G)	パリ音楽院管弦楽団	11
7	交響組曲〔シェエラザード〕作品35 (Rimsky-Korsakov, N. A)	ウィーン・フィルハーモニー 管弦楽団	11
7	協奏曲〔四季〕作品8 (Vivaldi, A)	イムジチ	11
7	交響曲第3番ヘ長調作品90 (Brahms, J)	ベルリン・フィルハーモニー 管弦楽団	11

本学教官著作寄贈図書

(平成2年9月～3年2月受入分)

著者	書名	出版社	寄贈者
高橋 滋	現代型訴訟と行政裁量 (行政法研究双書)	弘文堂	総合科学部 高橋 滋
Iwasaki, M	Ophiolites and High Pressure Metamorphism. (Ofioliti Vol. 14 No.3 1989 Special Issue)	Instituto de Geologia (Italy)	総合科学部 名誉教授 岩崎 正夫

編集後記

野山を色とりどりで飾ってくれる自然の草花！ 寒い冬から温かい春へと生気を取り戻して、私達を慰めてくれます。

日々、学習の連続で受験戦争を勝ち抜いて来られた新入生のみなさん！
新たな生気を漲らせて、先人の遺産（図書やニューメディア—コンパクトディスク、ビデオテープ、レーザーディスク等）に触れ、心の糧を蓄えましょう。

今回は、沢山の先輩や先生方が、素晴らしい体験や経験談を掲載してくれました。

さあ……出掛けよう、新しい知識と憩いを求めて「図書館へ」

編集委員会：委員長・宮本博司 委員・熊谷正憲，三村康男

発行 徳島大学附属図書館

(〒770)徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島(0886)23-2310 内線(6111)

F A X 附属図書館(0886)55-9593 蔵本分館(0886)33-2950